

「高齢」も「障がい」も
個性のひとつ、
その人らしい住まい方を
提案しています。

吉田 紗栄子さん

1級建築士・バリアフリーコンサルタント
取材レポート『めづるくらじ』研究会 編集部



2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催にあわせ、「パラ選手をお茶に呼ぼう!」と、旧知の仲間呼びかけ、会[※]を設立した吉田さん。

実は、第1回東京オリンピック開催の1964年、大学3年生のときに通訳として活躍した経験をお持ちです。続けてパラリンピックにも日本赤十字社が組織した「語学奉仕団」[※]として参加。オリンピックの閉会式を終え、パラリンピックの準備が急ピッチで進められていた開村の前夜、代々木の選手村に宿泊しました。そこで、自衛隊の人たちの改造工事を目の当たりに。

「車イスの選手のために入口の階段をスロープにしたり、トイレの扉を払ってカーテンを引いたり。あつという間に障がいのある人のための選手村に早変わり。私は住居学を専攻していましたが、バリアフリーという言葉すらなかった時代です。こういう分野があるんだ!と。卒業論文のテーマを「車椅子利用者のための設計」にしました。」

それから50年以上のときを経て、公共施設など物理的なバリアフリーは、急速に進んだものの「住宅のバリアフリーは追いつかない。元気なうちに住まいを見直して欲しい。」と嘆きます。障がい者に対する偏見や差別も完全にはなくならず「車イスで遊びに来られる住まい」を提案しても理解者は少なく、歯がゆい思いは続いています。

吉田 紗栄子 よしだ さえこ

1級建築士・バリアフリーコンサルタント

1943年生まれ。日本女子大学住居学科卒業。高校生時代に父親の転勤に伴いイタリア・ローマで生活する。堪能な英語とイタリア語をいかし、大学3年生の時に1964年東京オリンピックでは競技会場の英語通訳、パラリンピックではイタリア選手団の通訳ボランティアを務める。その際の車イスでも不自由なく過ごす選手たちの様子を見て感動し、住まいのバリアフリー設計を一生の仕事に選ぶ。50年以上バリアフリーの家作りに取り組む、バリアフリー建築の先駆者。「JID 賞インテリアスペース部門特別賞 (1998)」、「第18回 住まいのリフォームコンクール 高齢者・障害者部門優秀賞 (2001)」、「日本女子大学 第17回 住居の会奨励賞 (2015)」などを受賞。主な共著として、『50代リフォーム素敵に自分流 - 住まいのプラン集 (住まいのプラン集 - 女性建築士による快適住プランの提案)』、『バリアフリー 住まいをつくる物語』など。横浜市在住。



(有) ケアリングデザイン 1級建築士事務所: 代表
<https://www.caring-design.or.jp/author/saekoyoshida/>
NPO 高齢社会の住まいをつくる会: 理事長
<https://www.kourei-sumai.com/index.html>
一般社団法人 64語学奉仕団のレガシーを伝える会: 代表理事
(問い合わせ) nabafco_yoshid@yahoo.co.jp



企業の研修などで来日したアジアやアフリカの障がい者をお茶に招き、一般家庭訪問の機会を提供。まさに「車イスの友達が遊びに来れる住まい」。